

令和7年度 学校経営計画報告書

八王子市立高嶺小学校
校長 松久保 雅和

学校教育目標 た たすけ合う、思いやりのある子(思いやり) か 考えを深め、自分から学ぶ子(知恵) ね ねばり強く、最後までやり抜く子(勇気) ○は本年度重点目標 ～子どもファーストで判断し、教員一人一人が生き生きと楽しく教育活動を行うことにより、児童が生き生きと主体的に学ぶ学校～				
基本方針	中期目標	今年度の重点目標	具体的な方策	成果の検証
安心して生活でき、一人一人が居場所のある学校	生活指導を充実させる。	いじめを許さない学級経営を行う。 規範意識を高める。傍観者的態度を取らせない。	トラブルはその日のうちに解決し、関係保護者と共有する。 毎週全教職員でいじめ対策委員会を行い、早期発見早期解決に努める。	保護者アンケートのいじめを許さない学校の項目では6月の82%、11月には83%とほぼかわらない結果となった。改善すべきは「わからない」が15%程度の保護者が感じている点である。年度初めの保護者会、7、12月の学校だより、学期末の個人面談で周知しているところではあるが、まだ十分ではないと感じている。トラブル発生を受け、校内委員会で対応を検討し、担任をはじめ学年、専科、サポーター、管理職等全校体制で見守り、対応している。経過を生活指導夕会で共通理解し、保護者へ報告、足並みをそろえて子供たちに寄り添うことでトラブルの発生源を解消していることを今後も伝えていく。子供たちは前向きな気持ちで、落ち着いた学校生活を送ることができた。
	人権教育を推進する。	自分の人権も他者の人権も守れる児童を育てる。 自他を大切に育てる。	「みんなちがってみんないいい」を合言葉に新型コロナを含めた人権教育をすべての教育活動を通して実践し、人権意識を高める。	保護者アンケートでは89%人権尊重の意識が身に付いていると回答した。本校の児童は道徳的実践力が高い。その理由として道徳の授業では、どの学級も考えるに足る発問や議論に値する発問を投げかけている。その上で考える場面や議論する場面では多角的、多面的なとらえ方を正直に出させ、どうしていけばよいかを自分で判断させている。このことを日々の学校生活で問い返す指導により道徳的実践力を高めている。また、自他理解教育を2年前から第4学年で行っている。この授業も児童が自他を大切にしようとする人権意識の高まりにつながっている。
	教育相談を充実させる。	児童の心に寄り添う。児童の声を聴く。児童が教員から見守られていると実感できるようにする。	巡回相談を活用する。教師と児童の対話を重視し信頼関係の確立を図る。 スクールカウンセラーを積極的に活用する。5年生全員の面接を行う。	月1回の都巡回相談では、特別支援教室に入室している児童を中心に見取りを行っていただき、かわり方、支援の仕方について助言を受け、夕会や校内委員会において教職員で共有した。スクールカウンセラーにも情報を共有し、特別支援教育コーディネーターが情報を集約することで支援体制を厚くすることができた。このことが保護者との連携でも生かされ、子供たちが安心して過ごすことができる体制づくりの大きな力となった。
	食育を推進する。	望ましい食習慣を身に付ける態度を養う。	栄養士を中心に食育を推進する。食物アレルギー対策に努める。	担任や栄養士が給食時間中に献立の紹介プレゼンを見せながら食育を行った。このことにより給食を楽しみにしている児童が93%と食に対する高い意識を持っている。調理の様子を写した動画モニターを事務室前に置いたことで児童の関心が高まったことに加え、食育メモの教室での紹介が定着したことが大きい。 アレルギー対策として保護者からの申し出のあった児童だけでなく、給食等で気になる場面のあった児童の保護者に対しても相談し、安全な配慮ができています。
学ぶ喜び、できる喜びが実感できる学校	「できた」「わかった」の積み重ねによる児童の自信と学習満足度を向上させる。	課題解決型授業を徹底する。ねらいを明確にし、魅力ある課題提示に努める。思考の時間を設定し児童の主体性を育てる。	週の指導計画作成の際、めあて、導入、思考場面を明らかにさせる。 授業改善プランを年間学習指導計画に位置付け、確実に改善する。 ICT機器を活用して個別最適な学びを一人一人が行えるよう授業研究を進める。	校内研究の成果として、今年度は本校の全学級で問題解決型の学習を行うことができるようになった。このことに伴い、児童の非認知能力すなわち学びに向かう力が高まり、児童アンケートで93.8%が授業でわかることが増えたと回答している。授業改善の1項目としてICT機器を活用した個別最適な学びについては授業のまとめの時間や放課後補習教室、家庭学習でのミライシードの活用が定着した。今後は本校で進める授業スタイルの魅力を保護者や他校の教員に簡潔に伝えられるようにし、絶えず児童主体の学習を教育活動全般において意識できるようにしていく。

	基礎的な知識や技能を定着させる。	学習規律を定着させる。一人一人のつまずきを発見し、克服させる。	「はい、立つ、です」「せ・め・て」などの授業規律を校内で統一する。習熟度別授業、放課後補習教室でミライシードを積極的に活用する。	授業規律については「はい、立つ、です」「せ・め・て」は低学年においては定着してきている。しかし、児童によっては、規律に縛られることを窮屈に感じたり、不安に感じたりして、逆に落ち着かなくなってしまう状況も出てきている。一人一人の個性に応じて対応する必要はある。上記のとおり、ミライシードの活用は定着しており、学期ごとの東京ベーシックドリル診断テストで100点を採れなかった児童が対象となる放課後補習教室では、学期末にはほぼ全員が課題を終了することができた。
	学力向上委員会の充実を図る。	学力向上委員会にて学力向上に向けた全校的な取り組みを推進する。	少人数算数担当を中心に放課後の補習、家庭との連携を通じた繰り返しの学習を計画的に実施し、学習内容を定着させる。	学力向上委員会で作成している基礎基本の学習の定着の手立ては年度途中で見直しが必要となった。放課後補習教室は地域のボランティアの方々を支えられており、採点やミライシードの進捗管理をお願いしてきた。しかし、ボランティアの方だけでは管理が難しかった。そこで、ミライシードの進捗は担任が管理し、ボランティアの方には採点のみをお願いすることとした。子供たちの主体的な学びを促すため課題を終了した児童も自ら課題を見つけ、参加してもよい形に修正した。すると、自主的に参加する児童も見られ、気持ちよく参加できる雰囲気になった。今後も児童の主体性を重視した形で進め、検証していく。学力の状況としては、八王子市
家庭・地域社会との協働による開かれた学校	開かれた学校から、開かれた教育課程を目指す。	児童・職員・地域との交流を推進する。保護者、地域と協働し学校の環境整備を行い、安全できれいな学校を目指す。各種ボランティアとの連携を図る。	学校運営協議会を中心に教育活動へのボランティア派遣の体制をつくり上げる。校舎周辺の清掃、校舎裏及び外周の草刈りを協力して行う。HP やメール配信等で保護者・地域に対しての情報発信を充実させる。夏祭り、防災訓練に職員がボランティアとして参加する。	学校運営協議会と学校とのかかわりを密にするため、いくつかの改善策を実行した。 ①学校の状況をさらにご理解いただくため、授業に参加する場を設定した。 ②委員が意見を出しやすい環境づくりのため、熟議の議題をある程度固定化した。 ③学校コーディネーターの役割をさらに発揮していただくため、委員を再選考した。以上のことにより、今年度末にはかなり機動的な学運協となった。2年後の50周年に向け、教職員と学運協とで手を携え、そしてきこゆとりをもって、準備を進めていきたい。 第1回地域合同防災訓練を実施することができた。課題としては保護者に参観者ではなく、参加者になってもらえる手立てを考える必要がある。
特別支援体制の充実	環境、指導のUD化を進め、インクルーシブの実現を目指す。	児童一人一人の状況を把握し、校内委員会を充実させ、関係者会議を開催する。	校内委員会を月1～2回開催する。特別支援教育コーディネーターを中心に担任の校内支援体制を構築する。ユニバーサルデザインの考え方を学び、誰もが安心して過ごせる環境づくりを推進できるようにする。	特別支援教育コーディネーターを中心に全校児童一人一人の状況を把握し、気になる児童について校内委員会で対策を立て、夕会で教職員に共有し、サポーターを適切に配置することで、児童は安心・安全に学校生活を送ることができた。その成果としてどの児童も穏やかに過ごすことができてきている。このことが保護者から学校への信頼につながっており、共育につながっていると感じる。また、不登校気味の児童への対応について教職員、関係機関と連携したことで教育関係施設につながることもできた。特別支援教室教員に通常学級第4学年で自他理解教育の授業を実施させ、児童の人権意識向上に寄与させた。このことが今後通常学級へのユニバーサルデザイン化、インクルーシブ教育化につながると考えている。
自主、自立の精神に満ちた児童の育成	学級の中で児童一人一人が役割をもち、自尊感情が高まるようにする。	学習面、生活面で一人一人の児童に理解・納得のもとで活動させる。目標をもたせ、達成に向け励まし、よさを認め、自己肯定感を高める。	授業時間のみならず、休み時間、給食、清掃、放課後などに児童と触れ合う時間を大事にし、ありのままの姿を認める。子供の小さな変化に気づき、向上心のもてる指導をしていく。	児童アンケート「学校は自分の大切さ、友達の大切さを認め行動できるように取り組んでいる」の質問に対して6月89%、11月88%と高評価を得ている。これは次の理由からと考える。教員の多くが毎日休み時間に校庭で児童と一緒に遊んでいる。遊びを通して教室では見えない児童の姿や友達関係が見え、児童理解を深めている。また、すべての教職員がアンガーマネジメントできており、トラブルが発生した際も諭しながら本音を引き出し、納得させ、解決させている。このことにより児童は自己肯定感を高め、自らを大切に、他人も大切にする心が育ってきている。

	特別活動を充実させ、児童一人一人が主体的に判断し活動できるようにする。	学級活動、児童会活動、学校行事などを通し、人に役立つ喜びを味わわせ、自己有用感を高める。宿泊体験活動の充実を図る。	学級での係活動や、委員会活動などで児童の行動を具体的に励まし、がんばりを評価していく。活動の中の経験を通し判断基準を教えていく。宿泊を伴う活動を通し、児童相互・児童と教員の信頼関係をより深める。	児童アンケート「行事や学習を通して楽しく学ぶことができている」の質問に対し93%と肯定的回答が多い。学級活動や委員会、クラブ活動では児童の主体性を引き出した活動計画が立てられ、その計画のもと児童が工夫して楽しんでいる場面を多く見かける。このことは移動教室等宿泊学習や社会科見学でも生かされており、自ら考え主体的に取り組むことで児童同士の信頼関係が高まっている大きな要因と考える。
	異学年交流を推進する。	異学年交流を行い、学年の違う児童同士が助け合い、協力し合い相手を思いやる心を育てる。	くすの木遊び、くすの木まつり、くすの木交流給食を児童主体で計画、実施する。	6年生で構成するくすの木委員会を中心に年間の縦割り活動を立案、実施した。この経験を通してとくに6年生の主体性、責任感が高まった。1～5年生をまとめ、楽しませることの難しさややりがいを感じることができるこの経験は学校生活では欠かせない活動と感じている。5年生にとっても6年生のリーダーシップにあこがれと目標になり、6年生になる心構えを身に付けることができる。来年に向けては企画・立案、運営、振り返りまでを児童に任せ、教師はあくまでも補助者という形で進めていく。
働き方改革の推進	校務DXを積極的に進める。	ICTを積極的に活用し、担任業務や校務分掌業務を効果的に軽減しつなげる。	OFF-JTを推奨し、他校や文科省リーダーシップDXの情報を本校の実態に合った形で取り入れていく。業者のシステムを積極的に活用し、校務の軽減を図る。	校務DXを具体的な形で進めることができた。 ①校務分掌表をより効果的に効率的に進められる形に修正した。 ②教科担任制を進め、教材研究の時間を削減できた。 ③1・2学期は面談で児童の様子を保護者に伝え、通知表を3学期のみにした。 ④ペーパーレスを進め、DX化により提案文書作成などを軽減できた。 このことにより、教員はゆとりをもって子どもと接することができ、教職員間でもお互いをリスペクトした心地よい関係づくりができた。